と次第をたつるは、皆據もなき僻事なり、誰の姿といふことはなく、只男女の姿なり、源氏紅葉賀卷に、紫の上、よき雛によき衣きせて、源氏君と號け給ひしは、其時にとりての事なり、當世少女のもてあそぶ紙人形、みづからつくりて姉樣と稱するが、卽古の雛なり、同物語に、十にあまれる姫君は、ひゝなあそびせぬ由いひしも、今世の紙人形の事なり、いにしへも當世の紙人形の如く常の物にて、三月には限らず、紫の上の雛あそびに、いぬきといへる少女が、雛の屋こぼちたるは、正月元日なり、さるを三月初巳日に、身滌の祓あり、雛形の紙にて、身のはらへして川へ流す故に、なでものとも、形代ともいふ、同物語東屋の卷に、

見し人のかたしろならば身にそへて戀ひしき瀨々の撫ものにせん、とよみしは、三月上の巳日の祓をよめるなり、そのなでものと、少女遊びの姉樣の雛と混じて、三月上の巳日の物となり、又三月三日の重三と、上巳と混じて、ひとつになりたるなり、外戎にては魏晉の頃より混じたるよし、宋書にあり、今は三日は、巳日ならでも上巳日といふがならはしなり、但ジャウシの日を音訓まじりにジャウミと唱ふるは拙し、

〔嬉遊笑覽六下兒戲〕今の雛祭は、上巳の祓を思へるにや、俳諧水鏡に、ひゝなあそびこそ、慥なる故もあらねば、打まかせては雜なるべし、源氏物語には、元日にも野分の朝にも、ひゝなごとありし由侍れば、今日に限らぬ〇此間恐有脫字　云られたり、但いさゝかあひしらひあらば、此ごろの俗に任せて、今日のことにもなりぬべしやとて、新續犬筑波集にも、少々まじへて入侍りし、此書享保十五年、涙花人紹蓮といふもの撰なり、それを後に增山井と書名をかへ、作書の名を削りて、季吟の名を入たるは、書肆が利を得むとての所爲なり、さて新犬筑波は季吟の撰なり、件の文は季吟が說を錄したるなれば、此頃の俗とは、萬治前後をいふ歟、それより前にもさるべきあたりには、もてはやしゝ事ながら、民間にも專ら行はれしは、おほやう其頃よりなるべし、犬子集は貞德の撰にて、寬永八年より同十年正月に云るし終る、守武千句、宗鑑が犬筑波に次での撰な